

特別支援学級に在籍する児童の自らのキャリアへの考えの変容に関する事例的研究

○浅川 浩佑（上越教育大学教職大学院）

西川 純（上越教育大学教職大学院）

(j275601c@myjuen.jp)

要約

文部科学省は、「特別支援教育におけるキャリア教育は、個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切に行われることが重要である。」と述べている。それに基づき、特別支援学級では児童生徒の就労を目指したさまざまな取り組みが行われている。本研究では、特別支援学級に在籍する児童と、その児童の今後のキャリアについて対話を重ねることで、その児童が将来幸せになるために、どのようなことが必要なかを明らかにした。その結果、自身の将来について抽象的なイメージしかもっていない児童が、対話を重ねることによって将来について自分なりの考えをもつようになった。

キーワード：特別支援学級，キャリア教育，幸せ

I 問題の所在

文部科学省（2011）は、「特別支援教育は、発達障害を含め障害のある児童生徒に対し、その自立や社会参加に向けて持てる力を伸ばすという観点から、適切な指導及び必要な支援を行うものである。障害のある児童生徒については、先述の各学校段階において示した考え方に加え、個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切なキャリア教育を行うことが重要である。」¹⁾ また、「障害のある児童生徒については、自己の抱える学習や社会生活上の困難について総合的に適切な認識・理解を深め、困難さを乗り越えるための能力や対処方法を身に付けるとともに、職業適性を幅広く切り開くことができるよう、個々の特性・ニーズにきめ細かく対応し、職場体験活動の機会拡大や体系的なソーシャルスキルトレーニングの導入等、適切な指導や支援を行うことが必要である。」²⁾ として、キャリア教育の重要性を示唆している。

特別支援学級におけるキャリア教育について藤井ら（2015）は、特別支援教育において全教育活動を通じてキャリア教育の視点を踏まえた実践の充実が求められているとし、作業活動を行いながら働くことについて学習する「食品加工」の実践の中で生徒の言動や記述の分析、評価による生

徒の変容の見取りによって、生徒の自己肯定感の高まりが見られることを明らかにした。しかしその一方で、生徒が判断する機会や、振り返りを多く設定する必要がある³⁾ としている。

稲垣（2012）は、小学校特別支援学級でのキャリア教育の取り組みとして、「読み書きや数の概念などの基礎を身に付けるための学習」「日常生活の指導（掃除、水やり等）」「休憩（娯楽活動）」の3つを授業時間中に設定し、それぞれの活動でコミュニケーション指導を随時行うことで、「すべきことが終わったら、好きなことができる」という生活リズムの定着を図り、就労した際に向けての習慣作りを行っている⁴⁾。

このようにキャリア教育というと就労に向けた実践が目立つ中で、渡辺（2001）は、「職業」は個人から独立して存在していることに対して、「キャリア」は個人から独立して存在しえないとして職業とキャリアを比較している。また、目の前の選択を具体的な職業との関連からだけで見るとはなく、昇進を願っているのか、安定した生活が重要かのように、クライアント自身の生き方や考え方と関連づけながら、選択を援助することによって、目の前の選択がクライアントのキャリアを創造するのに繋がるように援助する⁵⁾ と就職や就労の先のキャリアを見据える必要性を述べている。

西川 (2016) もキャリア教育について、子どもたちの幸せを本気で願えば、就職すれば終わり、でないことは当たり前で、子どもたちが幸せになるためには、結婚、子育て、老後までの一生涯を視野に置かなければならない⁶⁾としている。

これらの先行研究から、特別支援教育におけるキャリア教育について、子どものコミュニケーション能力を伸ばしたり、様々な職種に触れさせたりする実践は行われていることがわかった。

しかし、児童生徒の一生涯を視野に入れたキャリアについて考察している研究は管見の限り見当たらない。

II 研究目的

本研究ではキャリア教育の目標を勤労観・就労観よりも先に続く人生というキャリアにおいて、自らが一生涯幸せに暮らすために必要なことを理解することを目標とした場合、児童が自身のキャリアについてどのように向き合い、考えるのかを調査することを目的とする。

III 研究方法

<調査対象>

A 県 B 小学校 5 年生

特別支援学級 男子児童 1 名

<調査期間>

平成 27 年 11 月～12 月

<調査内容>

(1)IC レコーダーによる児童との会話の記録

児童にとっての理想の就業や老後のあり方といった視点から児童の考える幸せなキャリアデザインを対話によって導き出し、その様子を IC レコーダーにて記録する。

(2)IC レコーダーによる教員との会話の記録

児童との会話を起こしたプロトコルをもとに、児童の自身のキャリアへの考えを担当の教員と共有し、そこでの会話を記録する。

<分析方法>

(1)IC レコーダーによる児童との会話の分析

IC レコーダーによる会話の記録からプロトコルを起こし、児童の自身のキャリアへの考えを調査する。また回数を重ねることで、その考えに変化は現れるのか、変化した場合、変化の

きっかけとなったのは何かを検証する。

(2)IC レコーダーによる教員との会話の分析

教員との会話をプロトコルに起こし、児童の言動によって受けた印象について分析する。

IV 結果と考察

自身の将来について抽象的なイメージしかもっていなかった児童が、対話を重ねることにより将来についての考えに変化が見られた。

※詳細については、当日発表する。

引用・参考文献

- 1)中央教育審議会:「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, 2011.
- 2)同上 1) .
- 3)藤井朋子, 若松昭彦:「特別支援学級における社会的・職業的自立を目指した生活力を育成するカリキュラムの研究開発-キャリアマネジメントにおける「食品加工」の実践研究-」, 中学教育, 研究紀要 46 巻, 2015.
- 4)稲垣陽子:「小学校特別支援学級でのキャリア教育の取り組み」, 特別支援教育 No. 46, PP. 32-35, 2012.
- 5)渡辺三枝子:「キャリアカウンセリング入門-人と仕事の橋渡し-」, ナカニシヤ出版, PP. 18-20, 2001.
- 6)西川純:「アクティブ・ラーニングによるキャリア教育入門」, 東洋館出版社, P. 3, 2016.